飛鳥資料館夏のイベント「つくろう!!ミニチュア玉枕」

飛鳥資料館では、歴史を身近に、気軽に楽しんでもらう取り組みの一つとして、昨夏から子供も参加しやすいイベント「つくろう!!ミニチュア玉枕」を帝塚山大学の牟田口章人教授の協力を得て、開催しています。

玉枕は、一本の銀線でガラス玉を編み上げた枕です。阿武山古墳（大阪府高槻市）の副葬品で、十分な調査もされないまま埋め戻されたため、飛鳥時代につくられた玉枕の実物は見ることはできません。そこで、牟田口氏らは綿密な調査研究によって玉枕の復元品を製作し、飛鳥資料館に寄贈されました。

今回のイベントでは、ビーズで玉枕の編み方を体験します。製作にあたっては、わかりやすい作り方の説明、会場の雰囲気づくり、そしてスタッフの体制にこだわりました。特に、カラフルな模式図や写真を多用した飛鳥資料館オリジナルの玉枕づくりマニュアルは、「わかりやすい」と好評で、なんと１時間弱で完成させた参加者もいたほどです。

さらに、玉枕づくりをただの「工作体験」ではなく、飛鳥時代や歴史への「学び」につなげるため、イベントの冒頭で、１日目は牟田口氏による玉枕の解説、２日目は小学校低学年にもわかりやすい飛鳥時代の解説をしました。飛鳥時代の解説では、子供たちの発言も相次ぎ和気藹々とした時間を過ごせました。

アンケート結果をみてもイベントの満足度は高く、また、飛鳥資料館を知らなかった・初来館したという参加者が多数を占めました。今後も飛鳥資料館では、歴史や文化財の魅力が体感できるイベントや展示活動を企画していきます。みなさま、ぜひ足をお運びください！　（飛鳥資料館　西田 紀子）

完成したミニチュア玉枕と記念撮影

「現場でみつかる地震災害痕跡」の紹介

死傷者６千人を超えた阪神・淡路大震災から今年で23年が経ち、この間に液状化が発生しやすくなる等、被災規模が大きくなる震度５弱以上は109件発生しました（気象庁HP「日本付近で発生した主な被害地震（2018.9.7現在）」にもとづく）。この発生件数は、私たちの暮らしがいつ地震災害によって一変するか分からないことを示しています。

奈良文化財研究所では、2014年から国立文化財機構が推進する「文化財防災ネットワーク推進事業」、さらに地震･火山噴火予知研究協議会に「考古資料および文献史料からみた過去の地震･火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業を通して参画し、防災・減災への取り組みをおこなっています。この取り組みは、主に発掘調査にともなって発見される様々な災害の痕跡情報を集成し、そこから全国の災害履歴のデータベースを作成し、様々な防災、減災研究の基盤を整備することを目的としています。発掘調査では、災害痕跡調査が主目的になることはありませんが、近年、その情報の重要性が認識されるようになり、多くの現場から災害痕跡の認定や調査、記録方法についての質問が届くようになりました。

そこで今回、まずは調査現場で発見される地震の災害痕跡について、１）よくみられる堆積構造の名称や形状パターンと基本的な発生メカニズムについての説明や、２）調査現場で地震の痕跡として判定する際の確認すべき項目や記録方法、３）地震痕跡と誤認しやすい事例や調査担当者の目からみた地震痕跡のイメージについての聞き取りを野帳サイズに簡潔にまとめた、携帯版「現場でみつかる地震災害痕跡」をとりまとめました。埋蔵文化財調査の新しい切り口として、また未来の私たちの生活のためにも、現場でご活用願えたらと考えています。

（埋蔵文化財センター　村田 泰輔）

リーフレット表紙